

特集 『前に』 新型コロナウイルス感染症の影響の中で

今しかない夏



新型コロナウイルス感染拡大の影響

- 2月28日 福島県教育委員会では、3月2日から春季休業までの間、臨時休業を要請
- 3月2日 学校が休校（練習は継続。ただし、公共交通機関は使わない、人と接触を防ぐなどの対応を実施）
3月のキャンプ・練習試合が中止
- 4月上旬 ようやく練習試合を行う
- 4月7日 政府が7都道府県に緊急事態宣言を发出
- 4月16日 政府が緊急事態宣言を全国に拡大
- 4月17日 福島県教育委員会では、4月21日から5月6日までの間、臨時休業を要請
- 4月19日 チームは活動休止（福島県以南の選手は寮に残り、福島県以北の選手は実家に帰り、自主練習を開始）
- 4月21日 福島県が緊急事態措置を発表
- 4月28日 福島県教育委員会が5月7日以降の臨時休業延長を要請
- 5月4日 政府が緊急事態宣言を5月31日までの延長を決定
- 5月6日 実家に帰郷していた選手が寮に戻る（オンライン授業の開始のため）
- 5月14日 政府が39県の緊急事態宣言を解除
- 5月15日 福島県が緊急事態措置を解除。県教育委員会が学校再開に当たっての教育活動の在り方に関する指針を発表（段階的な教育活動の再開）
- 5月19日 学校の段階的教育活動再開に伴い、全体練習を再開
- 5月21日 政府が関西3府県の緊急事態宣言を解除
- 5月25日 政府が4都道府県の緊急事態宣言を解除（全都道府県の宣言が解除）
- 5月31日 県内の高校と練習試合（東日本大昌平高校）
- 6月～ 各校校長の許可のもと県外の高校との練習試合を解禁
- 7月18日～ 福島2020夏季高校野球大会(代替大会)

新型コロナウイルス感染症拡大は
夢や目標に向かう学生スポーツにも大きな影響が
インターハイ、そして夏の甲子園も中止に
戦後史上最多、13年連続出場中の聖光学院の今に迫った。

平

成19年から甲子園に13年連続出場が続く聖光学院は、第1回大会から14年

連続出場した和歌山中学(現桐蔭)の史上最多回数に並ぶ期待のかかる夏を迎えるはずでした。

しかし、日本高校野球連盟は5月20日、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、甲子園球場で8月10日に開幕予定だった第102回全国高等

学校野球選手権大会について、地方大会も含めて中止を決定しました。2011年の震災も乗り越え出場してきた甲子園への道は閉ざされました。聖光学院野球部の選手たちは、この困難な状況をどのように受け止め、前に進もうとしているのでしょうか。そこには、変わらずひたむきな姿がありました。

聖光学院野球部 ウォッチ

聖光学院野球部の部員数

111人 (3年34人、2年43人、1年34人)
中学生の時の同じチームの先輩後輩の繋がりが入部してくる選手が多い。

光る選手を育成するシステム

部員が多いため効率よく、選手に合った内容で練習を行うために3つに分かれている。基本Aチームは3年生と戦力となる下級生、Bチーム・育成チームは1、2年生

最も連続出場している高校は

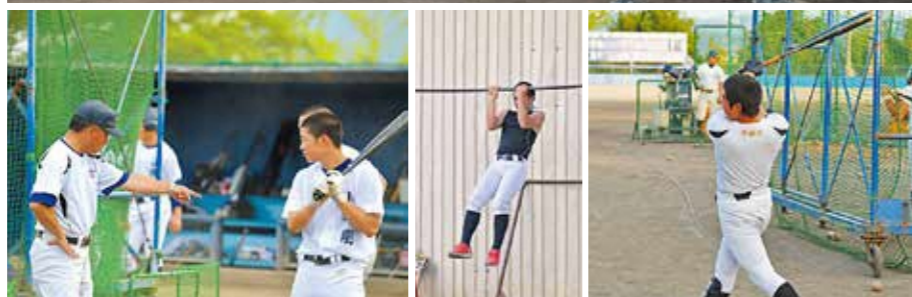
最多記録は、和歌山中学 (現 桐蔭) 14年連続 (第1回～第14回)
聖光学院は13年連続出場 (平成19年～継続中)
その他の連続出場中は、作新学院 (栃木県) 9年連続

強豪がそろう甲子園の成績

聖光学院の成績は、通算23勝21敗 (春4勝、夏19勝)
最高ベスト8 (春1回、夏4回)
過去には、履正社、日大三高、広陵、愛工大名電など強豪校に勝利している。

聖光学院の出身のプロ野球選手

歳内宏明 (阪神)、園部聡 (オリックス)、横山貴明 (楽天)、八百板卓丸 (楽天・巨人)、湯浅京己 (阪神)、岡野祐一郎 (中日)、佐藤都志也 (ロッテ)



どんな困難な状況でも、変わらずひたむきに今できることに取り組む聖光学院野球部

Special Interview ①



『受け入れることで前に進む』

聖光学院高等学校 野球部監督 齋藤 智也さん
SAITO TOMOYA

甲子園が中止に
まさに衝撃。人生の中で一番不条理。試練だと思えました。選手たちはもっと辛かったと思います。
ただ、受け止めないと前に進めない。いかに受け止めることができるかが、一歩前に踏み出すことにつながります。そのための準備が必要だと感じました。
春の大会が中止となり、夏がある、やっついこうと言いついて聞かされて、モチベーションを下げないようにしてきましたので、悔しさ、やるせない気持ち、いろいろなものがありました。可能性がないものにこだわっても仕方がないので、選手たちには早めに伝え、覚悟を決めるしかない。選手たちに甲子園が中止になったから、野球をやめるか？と確認しましたが、誰一人野球をやめる選手は現れず、代替の大会に向けて野球を続ける気持ちを確認できた時に再スタートできると感じました。

この状況での秘策は
同じ価値観を持つことが秘策。いつもと変わらない野球をやり通すだけ。
この状況を受け止めることができないと消化不良を起します。新型コロナウイルス感染についても状況を受け入れることが大事だと。受け止めることが大事だと。受け止めることができれば、こだわることがなくなる、とられることがなくなる。震災の頃に似ているのではないのでしょうか。
夏の大会に向けて
いつもどおり、負けにこだわらない野球を追求していきます。選手がひたむきに、潔く戦う姿を市民の皆さんに見てもらいたい。甲子園がないのになぜこんなに熱く、一生懸命な野球ができるんだろ？と思われる野球を追求していきたい。びつくりするくらいに。無言のメッセージとして伝えることにこだわりたいです。

Special Interview ②



『自分たちへのリベンジ』

聖光学院高等学校 野球部主将 内山 連希さん
UCHIYAMA RENJI

変わらない目標に向かって
春の大会に向けていい状態でしたが中止に。夏の甲子園があると思っていましたし、小さい時からずっと甲子園を目指して野球をやってきたので中止が決めた時はとても残念でした。でも、野球をやれる状況じゃないという気持ちもありました。
中止の決定を受けて、監督から「自分にできることをやりきろう」と話をいただきました。選手同士でミーティングを重ね、この2年数カ月の間、みんなを取り組んできた野球は甲子園がなくなっても変わらない、仲間との時間は無駄ではない、家族の支えがあって野球を続けられたことへの感謝などを確認しあいました。そして、明確な目標として、聖光学院の野球をやりきることで選手の気持ちは一致しました。
代替大会に向けて、甲子園はなくなってきたけど、変わらない目標を目指しきって、昨秋の情けない自分たちのリベンジをしたいです。

変わらずひたむきに 今しかない夏に挑む

困難へのチャレンジ

昨年の秋の県大会の初戦敗退以後、ひたむきに自分に向き合い、選手同士のミーティングを重ね、春を迎える頃には「圧倒的な力はないがまとまり、考え方は広がった」と横山部長が大きな手ごたえを感じるまで成長してきました。緊急事態が宣言された4月にチームは活動休止、寮に残る選手、地元に戻る選手に分かれながらも自主練習を行い、四字熟語の勉強や本を読んだり、普段できないことにも取り組むことで、マイナスしか

ない新型コロナウイルスの影響の中で、考え方が変わるなどプラスな面も現れ始めました。

変わらぬ夏へ

6月、青空の下で仲間と声を掛け合い、支えあう、ひたむきに野球に取り組む選手たちの普段と変わらない姿が見られました。7月18日から開幕する代替大会では、市民や高校野球ファンの胸を熱くする戦いをきつと見せてくれるはず。どんな逆境でも前向き、勇気と希望を与えてくれる選手たちに「エールを！」